ダロウカとノダロウカの使い分けについて

—日本語母語話者作文の使用実態から—

松本　匡史

【キーワード】
ダロウカ、ノダロウカ、JCK 作文コーパス、ノの有無

【要旨】
本研究は「ノ＋形式」を対象とし、使用実態からノの有無の使い分けを明らかにするものであるが、本稿はその中でも文末に現れる「(ノ)ダロウカ」に焦点を当てる。JCK 作文コーパスから日本語母語話者の使用実態を調査し「ノダロウカ」[1]と「ダロウカ」の使い分けを日本語学習者に提示することを目指し、産出のためのルールを考察する。

「(ノ)ダロウカ」は先行研究からその用法がいくつかに分類されるが、本稿ではこれらを「問題提起」「婉曲主張」「婉曲的質問用法」と呼称する。そして、「問題提起」はノ有り、「婉曲主張」はノ無し、「婉曲的質問用法」もノ無しを用いることにより使用上の問題は起きないことを理由とともに考察した。

1. はじめに

日本語の文末などに「のだ／んだ」が付される、いわゆるノダ文という文法項目がある。これは、外国人学習者に日本語を教える日本語教育において、指導が非常に難しい文法項目であることは、多くの日本語教師が実感していることだろう。この問題はノダ文が文中で担う多種多様な意味によるところにある。それゆえに、日本語学において数多くの研究がなされており、母語話者として納得できるものも多い。

しかし、ノダ文の周辺形式といわれる「のだろう」「のかもしれない」など、ある文法形式にノダ文の「の」が上接するもの（以下「ノ＋形式」）の説明は十分とは言えない。野田（1997:212）では、「「のだろう」は、基本的に、対事的「のだ」の機能と「だろう」の機能をあわせたものだと考えてよい。「のにちがいない」「のかもしれない」も同様である」と述べられており、このようにノダ文研究では周辺形式である「ノ＋形式」に多くの説明を割くことはあまりされていない。本研究は「ノ＋形式」を対象とし、その使用実態からノの有無の使い分けを明らかにするものであるが、本稿ではその中でも文末

[1] 以下、文末に現れる「のだろうか」「んだろうか」「のでしょうか」「んでしょうか」「のであろうか」「んであろうか」を含め「ノダロウカ」と記す。同じく「だろうか」「でしょうか」「であろうか」を含め「ダロウカ」と記す。

に現れる「ノ＋ダロウカ」に焦点を当てる。

庵（2015:20）では日本語記述文法（母語話者のための文法）と日本語教育文法（非母語話者のための文法）の違いについて、前者は「母語話者に対する説明では、母語話者の内省に依存した説明が可能」であり、後者は「非母語話者に対する説明では、こうした内省に依存した説明はできない。（中略）非母語話者に対する説明は、母語話者に対する説明とは（全く）異なるものと考えるべきである」と述べられている。これを踏まえノダロウカについての研究を見てみると、日本語教育文法としてはまだ不十分であると考える。

そのため、本稿の目的は、ノダ文の周辺形式である「ノダロウカ」と「ダロウカ」の使い分けを日本語母語話者作文の使用実態から探ることにある。そしてそれをまとめ、非母語話者が産出するための使い分けのルール[2]の提示を目指す。

2. 先行研究

2-1　先行研究概観

まずここでは、ダロウカの研究動向を概観する。

三宅（2010a,b）では、疑問文に生起したダロウをダロウカとし、疑問詞と共起し末尾の「カ」が省略されたものも含め考察を行なっている。三宅（2010a:11）では、ダロウ類の枠組み的意味を「命題を想像の世界において認識する」とし、ダロウの推量形式の意味機能を「話し手の想像の中で命題を真であると認識する」と定義している。それを踏まえ、ダロウカを「不定推量」と呼び、「話し手の想像の中で命題が不確定であると認識する」（三宅 2010b:60）と定義している。そして、不定推量から拡張された用法として、「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」という用法の存在を指摘している。三宅（2010b）から、独話で使われたり婉曲的な質問に使われたりする様々なダロウカが、「話し手の想像の中で命題が不確定であると認識する」とする枠組み的意味から拡張された用法であることが明らかにされた。

キャアコップチャイ（2010）では、2000 年以降に刊行された小説でのダロウ類の使用実態から、①推量用法、②確認用法、③疑念用法、④婉曲的質問用法、⑤感動用法の 5 つの用法と、それらの用法のいくつかの下位分類も明らかにされた。これらは実際の使用実態からの分類であり、その分類基準も過度に抽象化・複雑化されておらず、簡潔にダロウ類の意味機能がまとめられている。キャアコップチャイ（2010）から、ダロウ類の実際の使用例を元にして、5 つの用法といくつかの下位分類が明らかになった。

これまで見てきたように、ダロウカについての研究は、複数の上位用法とその下位分

---

[2] 「使い分けのルール」とは、学習者が産出時に類似語彙を使い分けるための目安となる指針、規則を想定している。白川（2018:69）では「母語話者であればなんとなく納得してしまう説明であっても、学習者にとっては不十分であり、もっと踏み込んだ使い方の説明がなければ具体的な場面に応じて適切に運用することができない」とし、抽象的ではない具体的な説明が学習者（日本語教育研究）には必要であるとの認識を述べている。

類がいくつかあるとされ、先行研究によって、その定義や分類には細かな違いはあるが、概ね用法の分類は明らかになったと言って良いだろう。しかし、いくつかの研究ではそもそもノダロウカを考慮に入れておらず、ダロウカの用例と区別せずに考察されている[3]。日本語の母語知識を持たない学習者にとっては、内省に頼らないダロウカとノダロウカの使い分けの違いが明らかにされたとは言い難く、これを明示する必要があると考える。

2-2　問題の所在

ここでは本稿と直接関係のある 2 つの先行研究とその問題点を見ていく。

まず初めに三枝（2002）では、書き言葉におけるダロウカとノダロウカの違いを新聞データを用いて分析し、ダロウカの意味を「文の内容の真偽を不確実なものとして示す」とし、ノダロウカを「文の内容と背景の事情とが照応しているか否かを一つの事案として客観的に示す」（p.26）と定義している。そしてダロウカは「書いている話の流れの中で浮かんだ疑いという「現場性」の意味合いが強い」とし、ノダロウカは「背景となる事情から推理されたできごとと、「のだろうか」の前の部分で述べるできごととの照応を行い、内容を確認していて、立ち止まり振り返って抱いた疑いという「客観性」が感じられる」と述べられている。そして、最後に日本語教育への応用として使い分けのルールを以下のように提示している。

> 使い分けのルールとしてわかりやすいのは、疑問詞と共起する場合である。疑問詞が述部にあるときは「だろうか」、述部以外にあるときは「のだろうか」が用いられる。（三枝 2002:36）

三枝（2002）では、これまで行われていなかったダロウカとノダロウカの使用実態調査から、いくつかの特異な構文的特徴が見出された。共起する品詞の特徴や疑問詞の出現位置など、内省を持たない学習者にとってこのような構文的特徴はある一定の使い分けルールとして考えられるだろう。しかし、「疑問詞が述部ではダロウカ／述部以外ではノダロウカ」というルールだけでは、例外が多すぎることは容易に想像がつく[4]。そして、疑問詞が共起しない文に関しては明確な使い分けルールが提示されていない。「ダロウカは「現場性」／ノダロウカは「客観性」」という説明も母語話者としては納得できるが、

---

[3] キャアコップチャイ（2010:174）では、「「のだろう」を対象としない」と述べられている。馮（2019）では、書き言葉におけるダロウカの使用実態について考察しているが、特段ノの有無についての違いは考慮されていない。

[4] JCK 作文コーパスでは以下の用例が見られる。述部に疑問詞があるがノダロウカが用いられている。

（ア）また、今後はどうなるのだろうか。（j01-2-2）

（イ）もちろん、いつかは結婚したい、子供も欲しいという思いはあるのだが、それはいつなのだろうか。（j15-2-7）

些か抽象的なため学習者に簡単に理解されるとは考え難い。そのため、使い分けルールの精緻化と使用場面（文脈）を詳しく提示する必要があると考える。

次に庵ほか（2000）について述べる。庵ほか（2000）は日本語教師向けの総合的な文法解説書のため、ノダロウカだけでは項を立てていないが、所々に関係する記述がある。ここでは「疑問文が焦点や前提を持つ（＝疑問文で「のだ」が必要な）場合」（p.284）に注目して述べたい。これはどのような場合に疑問文中にノダが含まれるかを述べた箇所で、条件が簡潔ながらも分かりやすくまとめられている。ノダロウカもノダが含まれる疑問文と考えられるため、この条件が当てはまると思われる[5]。以下に庵ほか（2000:280-290）の記述をまとめたものを示す。

【疑問文が焦点や前提を持つ（＝疑問文で「のだ」が必要な）場合】
① 疑問文中に疑問語（疑問詞）が含まれている（疑問語疑問文の）場合
　※疑問語が述語に含まれている場合は不要
　※「どうして」のような理由を表す語の場合は常に必要
② 疑問文中の成分が音声的に強調されている場合
③ 疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合
　※従属節を含む場合は常に必要

条件③の「必須成分以外」というのは学習者にとっては判断しにくいと思われるが、簡潔で分かりやすい条件である。そして、学習者に提示するためと思われる以下の図 1 が示されている。

図 1 もノダ（ノカ）の複雑な条件が簡潔にまとめられている。しかし、本稿で用いた JCK 作文コーパスの日本語母語話者の使用実態を観察すると、ルールの見直しが必要ではないかと思われる。以下の用例で図 1 の不足を見ていく。

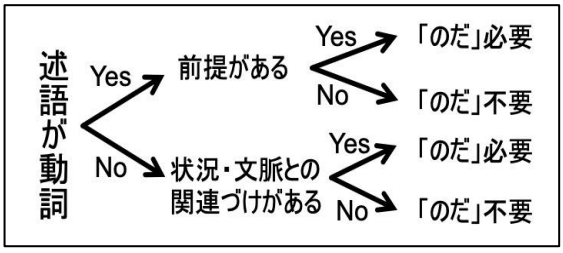

図 1 疑問文で「のだ」が必要とされる場合
（庵ほか 2000:290）

(1) 江東区というと、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。
（j04-1-d1）[6]

[5] 庵ほか（2000:274）では、本稿でいう「ノ＋形式」（ノダロウなど）について、「こうした場合の意味は「のだ」の意味と、モダリティ表現の意味を合わせたものとして考えられます」と述べられている。そのため、図 1 の疑問文でのノダの使用有無についての説明は、ダロウの疑問文である(ノ)ダロウカにもある程度は当てはまると考えられる。

[6] 括弧内は JCK 作文コーパスの用例情報を示している。（j04-1-d1）のはじめの英字は国籍を、その次の数字は作文作者の ID 番号、中央の数字は作文のタイプ（1. 説明文、 2. 意見文、 3. 歴史文）を表しており、ここまでは JCK コーパス内の整理番号である。最後尾の数字は本研究内での筆者による用例整理番号である。

(2) このように、二つの側面で晩婚化の解消は困難を有しているため、今後も晩婚化は進行していくと考えるのが妥当ではないだろうか。（j09-2-3）

例（1）は図 1 を参照すると、述語が動詞で前提（疑問詞）があるため、ノが必要となるはずであるが付されていない。そして、JCK 作文コーパスの実例からは例（2）のような「(の)ではないだろうか」という用例が多数見られるが、図 1 での扱いが不明である[7]。

ここまで述べてきたように、実例を見てみると、図 1 をどのように進めばよいか判断に迷うことが多々ある。加え、「疑問文で「のだ」が必要な場合」の条件は上述したように 3 つあるが、③の「疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合」は学習者にとっては判断が難しいと思われる。

このように庵ほか（2000）の記述は非常に優れているが、いくつかの用例で判断に迷うことや説明がつかないものがある。例に挙げた文が特殊で例外的なものというわけではない。JCK 作文コーパスの日本語母語話者は日本人大学生で、文章のレベルはあまり高くなく、特殊過ぎる文体ではない。語彙量の違いはあるが、N1 レベルの日本語学習者でも書けるものであり、日本の高等教育機関に進学する者にとっては書く必要があるものだろう。そのため、日本語教育への提言を目指すならば、庵ほか（2000）の使い分けルールを、少なくとも JCK 作文コーパスの用例をカバーできるくらいには見直す必要があると考える。

ダロウカ類の意味用法についてはある程度研究は進んでいるが、ノの有無については未だ不明瞭と言える。そのため、本稿では日本語母語話者作文の使用実態から、ダロウカという文型におけるノの有無の使い分けルールを提示することを目的とする。

3. 使用実態調査

3-1 調査対象

本稿では、学習者の産出機会を考えたとき、日本の大学などに進学する学習者を念頭に、レポートや論文、作文などの書き言葉に用いる機会が多い文末[8]に出現するダロウカ

---

[7] 査読者より、「(の)ではないだろうか」は図 1 のルールにはそもそも対象として含まれていないのではないかという指摘を受けた。確かにその可能性はあり、「(の)ではないだろうか」という句形をどのように捉えるかによって異なってくるだろう。これを「(の)ではないか」のバリエーションの一種として捉えるか、またはダロウカの一種として捉えるか、もしくは「(の)ではないだろうか」という一つの表現として捉えるかなど、いくつか考えられる。これに関しては今後の課題としたいが、ひとまず本稿ではダロウカの前にノが上接する「ではないのだろうか」という表現があることと、キャアコップチャイ（2010）で「(の)ではないだろうか」はダロウの疑念用法の「断定回避」として扱われていることから、これを疑問表現のダロウカとして扱うこととする。

[8] 文中形式は「(ノ)ダロウ＋助詞類など」であり、複文の従属節または主節であったり、名詞修飾節であったり、一つ一つの出現数自体は少ないが使われ方が多様であり、使用実態か

を考察対象とする。そして、そのような学習者が作文などを書く機会において、産出の手助けとなるような使い分けルールを提示することを目的とするため、本稿では日本語母語話者作文を調査対象とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) は日本における書き言葉最大のコーパスであるが、学習者にとっては産出する必要がなく理解のみで十分なデータもあり、本稿の目的には適さないと考える。そのため、本調査では日本語母語話者と非母語話者の作文データが揃っている『JCK 作文コーパス』[9]を調査対象とする。なお、非母語話者作文の分析は紙幅の関係上、今後の課題とし稿を改めて述べたい。

3-2　分析の枠組み

本稿では、調査結果の概観のためキャアコップチャイ（2010）を援用するが、一部変更を加える。キャアコップチャイ（2010）は使用実態からダロウ類の用法を分類したもので、多数の実際の使用例から用法を分類しており、現実に則した分類である。ダロウ類を大きく 5 つの用法に整理し、その下位にもいくつかの用法を分類している。①推量用法、②確認用法、③疑念用法（「自問」「断定回避」「反語」が下位分類)、④婉曲的質問用法、⑤感動用法（「感動感嘆」「感動詠嘆」が下位分類）の 5 つ[10]であるが、本稿ではそのうちダロウカ（または疑問詞と共起するダロウ）を用いる③と④を対象とする。⑤も(ノ)ダロウ(カ)を用いるが、この用法はノやカを脱落させても文の大意は損なわれない特殊な用法であり[11]、JCK 作文コーパスでも母語話者は 1 件のみの使用しか見られなかった。そのためこの用法を本稿では考察しない。

ら使い分けルールを提示するためにはJCK作文コーパスではデータ数が足りないと考えるため本稿では除外する。同様に一件だけ抽出された「だろうと。」も除外する。

9 『JCK 作文コーパス』は、科学研究費補助金「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(2013 年度～2015 年度、基盤研究（C）、研究課題番号:25370577、研究代表者:金井勇人）の研究結果として作成されたコーパスである。日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文が全 180 本収録されている。作文執筆者の属性は、日本在住の日本人大学生、日本語能力試験の N1 合格者および合格相当の力を持っていることが確認された中国在住の中国人大学生と韓国在住の韓国人大学生である。作文には 3 つのタイプがあり、「説明文（自分の故郷について）」、「意見文（晩婚化の原因とその展望について）」、「歴史文（自分の趣味（昔から続けていること）について）」である。

10 キャアコップチャイ（2010）から、以下に 5 つの用法の用例を引用する。
①夜更かしの母は多分隣の部屋で本でも読んでいるだろう。（推量用法）
②知らないうちに知らない人が出入りするのは、あんただって嫌でしょう。（確認用法）
③自分の全体重がスライドする浮遊感、何年ぶりだろう。（疑念用法）
④ええと、少々お待ちくださいませ、こちらでよろしいでしょうか。（婉曲的質問用法）
⑤なんて子供っぽい、いいやつらなんだろう。（感動用法）

11 キャアコップチャイ（2010）でも⑤感動用法は「「なんと～だろう」を修辞的に用いて表現するもの」（p.171）と述べられているように、「の」や「か」ではなく、不定語の「なんと／なんて」とダロウの組み合わせにより、このような表現効果が得られるものである。そして、これ以外の四用法とは「性質上の大きな懸隔」（p.173）があるとも述べられており、本稿ではこの用法を考察対象外とする。

なお本稿では、③疑念用法の下位分類である「自問」を「問題提起」、「断定回避」を「婉曲主張」とする。これは、作文では「自問」という独話を連想させる機能より、読み手に対して問題を提起する機能が主であり、実態に則した名称に変更した。同じく、「婉曲主張」も、使用実態から「主張」を述べる帰結部に多く見られるためである。そして、「反語」を廃した。これについては下記の用例（3）を参照されたい。

(3) しかし、彼女を受取人に指名した手紙が、本人の手で運ばれてくることに、警察は不審なものを感じないだろうか。（キャアコップチャイ 2010:168）

（3）はキャアコップチャイ（2010）では「反語」とされる用例である。確かに反語的な文ではあるが、これをダロウカ自体の機能の一つとして設定すべきかは疑問である。（3）は否定疑問文の形式であるが、この否定疑問が反語的な意味合いを出すのであり、ダロウカ自体が反語の意味を持つわけではないと思われる。確かに反語的な意味合いの文に接続することができるとは考えるが、ダロウカ自体に反語の意味機能を設定するかどうかは少し議論が必要であると考えるため、本稿ではこの「反語」を「問題提起」の一部とし、反語的な表現で問題提起していると捉えたい。以下にキャアコップチャイ（2010）を援用した本稿の分類基準を示す。

【分類基準】

①文末にダロウカがあるものは、疑念用法（「問題提起」または「婉曲主張」）、婉曲的質問用法、感動用法のどれかに分類する。カが脱落しダロウになる場合もあるが、疑問詞と共起する文のダロウはダロウカと同じとする。

②疑問語疑問文のダロウカは疑念用法の「問題提起」に分類する（例 4）。

(4) なぜ各国で晩婚化が進んでいるのでしょうか。（j04-2-d2）

③疑問詞が共起しない文（YesNo 疑問文）で、「カ」を脱落させても文の大意が損なわれないものは疑念用法の「婉曲主張」に分類する（例 5）。逆に YesNo 疑問文で、「カ」を文脈上脱落させられないダロウカは「問題提起」に分類する（例 6）。

(5) 基本の点前は覚えたから次の点前に進もうかと先輩にほめられるのがうれしくて、茶道部の活動によりいっそうのめり込んでいた私に転機が来たのは、入部してから 3 年ほどたったころでしょうか。（j04-3-d1）

(6) では昔であれば早く結婚する意義があるのだろうか。（j17-2-2）

④「(ノ)デハナイダロウカ」[12]は婉曲主張に分類する（例 7）。

[12] 庵ほか（2001:266）によると、「のではないか」は命題の真偽が不確実であることを述べるが、それが正しいという見込みがある場合に使われるとされている。前接する品詞が動詞とイ形容詞の場合は「のではないか」、ナ形容詞と名詞の場合は「ではないか」が接続されるが、後者の場合「形式上「ではないか」と「のではないか」の差がなくなります」

(7) また、女性の就学機会の増加も理由に数えられるのではないでしょうか。(j04-2-d3)

⑤読み手（第三者）に対して意見を問うような形や勧めの形をとるものは、婉曲的質問用法に分類する。書き手以外が示され体裁上読み手に意見を問うような形（例 8）や、「ご存じダロウカ」「いかがダロウカ」などがこれに当たる（例 9、10）。

(8) 江東区というと、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。(j04-1-d1)

(9) 沖縄県の石垣島をご存じだろうか。(j15-1-1)

(10)川崎市で文化散策などしてみてはいかがでしょうか。(j18-1-d4)

⑥「なんて／なんと／どんなに／どれほど＋こと／の＋ダロウ(カ)」の文は感動用法に分類する（例 11）。JCK コーパスの実例から感動用法のダロウカを分類したのち、4 節以降の考察からは除外する。

(11)（前略）そんな風に休日にトレーニングジムにいって筋トレする程スポーツに打ち込むなんて、なんて体育会大学生らしいのだろう。(j14-3-3)

3-3　調査結果の概観

上述した分類基準をもとに、JCK 作文コーパスにおける日本語母語話者の文末ダロウカを調査した結果を表 1 に示す。表 1 から、ノダロウカという形式はほとんどが問題提起で用いられていることが分かる。婉曲的質問用法と婉曲主張では、ノダロウカはほとんど用いられておらず、用法によってノダロウカの使用に差があることが明らかになった。次節以降使い分けについて考察する。

表 1　文末ダロウカ類の出現件数

	問題提起	婉曲主張	婉曲的質問用法	感動用法	計
ダロウカ	15	42	16		73
ノダロウカ	23	1			24
(ノ)ダロウ(カ)				1	1
計	38	43	16	1	98

4. 考察

4-1　「問題提起」用法

表 1 で見たように、各用法でノの有無の傾向差は確かにあるが、それは具体的な使い分けを表しているとは言えない。ここでは各用法における使用実態を観察し、ノの有無の使い分けルールを考察する。まず、「問題提起」の用法について述べる。この用法をキャアコップチャイ（2010）と三宅（2010a,b）を参考に「書き手が想像の中で命題が不確定であると認識し、それについてまったく見当がつかない状態を表す」とする。そしてそのような状態を示すことによって問題を提起する。まったく見当がつかない状態のため、疑問詞がない場合、ダロウカの「カ」を文脈上脱落させることができない。

と述べられている。そのため、本稿では「ではないか」と「のではないか」を区別せず、「(ノ)デハナイダロウカ」と表示する。

考察の上で問題となるのは、表 1 からも分かるように「問題提起」用法における使い分けである。庵ほか（2000）では、疑問文中に疑問詞が含まれている場合（Wh 疑問文）ではノ有りであるが、その疑問詞が述語に含まれている場合は不要と述べられている。それについて本稿での実態を表 2 にまとめる。表 2 は「問題提起」用法に分類されたもののうち、疑問詞と共起するものがいくつあるかをまとめたものである。「疑問詞○」は疑問詞と共起する Wh 疑問文であることを示している。表 2 から、Wh 疑問文ではノダロウカが多いことがわかる（例 12）。そして Wh 疑問文のダロウカ 13 件のうち、9 件はダロウに疑問詞が上接する場合である（例 13）。

表 2　疑問詞との共起件数

	疑問詞×	疑問詞○	計
ダロウカ	2	13	15
ノダロウカ	4	19	23
計	6	32	38

(12) 現在、多くの国で晩婚化が進んでいる。なぜ、人々はなかなか結婚しないのだろうか。（j01-2-1）

(13) 私たちの親の世代も恋愛の末に結ばれた場合が多い。だが、その上の世代、つまり私たちの祖父、祖母の時代はどうであろうか。（j14-2-a3）

そのため、庵ほか（2000）が述べているように、JCK 作文コーパスでも、Wh 疑問文ではノ有りだが、疑問詞が上接する場合はノ無しとなる傾向が見られる[13]。

それでは、表 2 の「疑問詞×」である YesNo 疑問文ではどうだろうか。庵ほか（2000）では、このような場合、動詞文では文に必須成分以外がある場合はノ有り、動詞文以外では「状況・文脈との関連づけがある」場合はノ有り、関連づけがない場合はノ無しとなる。本稿では、「問題提起」用法の YesNo 疑問文ではノ有りを用いることで不自然な使用などの問題は起きないと考える。実例ではダロウカが 2 件となっているが、そのダロウカの例を（14）（15）に示す。

(14) 29 歳で結婚と聞いて、女性の皆さんはどう思うだろうか。早いのか、遅いのか私は正直早いと思った。私は今大学 3 年生で 22 歳である。順当に卒業して就職したら 25 歳、入社して 4 年目とは仕事も覚えてきて、楽しくなって

[13] ここで問題となるのが、表 2 のダロウカの「疑問詞○」の 13 件のうち、疑問詞が上接しない 4 件の用例である。筆者の内省ではこの 4 件をノダロウカに置き換えが可能と判断し、疑問詞が上接する場合のみダロウカを用い、それ以外の「問題提起」用法はノダロウカを用いることにより問題が起きないと考える。以下に 4 件の用例を示す。

(ア) また、結婚することをゴールインなどと呼んだりする。しかし、これはいつからの常識であろうか。（j14-2-a1）

(イ) 現に、私の叔父はもうすぐ 50 歳になるが全く結婚する気配はないし、この先ずっとそんな気配は起こらないだろう。こういった事態を改善するにはどういった動きが必要であろうか。（j01-2-a6）

(ウ) 渋谷にはどんなイメージがあるだろうか。（j06-1-2）

(エ) このようなことが、晩婚化を助長しているものと思われるが、今後どのようになっていくだろうか。（j13-2-4）

きている頃だろう。結婚を考えられるだろうか。（j15-2-6）

(15) この様に、晩婚化は人生での選択肢の増加と結婚を巡る事情の変化が相互に影響しつつゆっくり進んでいったと言えるでしょう。さて、今後晩婚化はより進むでしょうか。（j21-2-d5）

筆者の内省では、(14')「結婚を考えられるのだろうか。」、(15')「さて、今後晩婚化はより進むのでしょうか。」としても問題はないように思われる。これらの文でノの有無による違いがあまりない理由は、ノダの「関連づけ」の効果だと思われる。「関連づけ」とは「ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示す」とされており、先行文や状況と関連させ、「理由」や「解釈」を表す（庵ほか 2000:270）。

これを踏まえ（14）を見てみると「29 歳での結婚」という話題に関連づけて書き手自身の解釈を展開し、命題が不確定であるということを述べ問題を提起している。(15) も同じように、現在晩婚化が進んでいることを述べたあと、それを踏まえ「今後の晩婚化」についての問題を提起している。つまり、何かしらの前提を踏まえた上での問題提起であり、ノダの「関連づけ」を適用できると考えられる。そのため、原文ではノ無しであるが、学習者がこのような文を産出する場合、ノ有りを用いるということを示しても大きな問題は起きないと思われる[14]。

4-2　「婉曲主張」用法

ここでは「婉曲主張」の用法について述べる。先行研究を参考にし、この用法を「書き手が想像の中で自らの主張が断定できないと認識しつつも、それについてある程度見当がつく状態を表す」とする。疑問詞とは共起せず、「カ」を脱落させて「ダロウ」としても文の大意は損なわれない（例 16）。「カ」があることによって推量用法の「ダロウ」より間接的な表現となり婉曲的な主張となる。表 3 からも分かるように「(ノ)デハナイダロウカ」となる使用例が多々見られ、この場合も「(ノ)デハナイダロウカ」を「(ノ)ダロウ」に置き換えることができる（例 17）。

表 3　「婉曲主張」の出現内訳

	YesNo 疑問文[15]	(ノ)デハナイ ダロウカ	計
ダロウカ	7	35	42
ノダロウカ	1		1
計	8	35	43

(16) 対策も進んでいくのだろう。考えられる対策とすれば、離婚のリスクを減らすなどだろうか。離婚には養育費や財産分与など、金銭的なリスクがかなり高い。（j11-2-13）

[14] 両者が置き換えられる場合において、微妙なニュアンスの違いというものは生じると考えるが、本稿では使い分けルールの提示に主眼を置いているため、深く考察することが叶わなかった。この問題は今後の課題とし、稿を改めて述べたい。

[15] ここでの「YesNo 疑問文」とは、例（16）のようなダロウカに「(ノ)デハナイ」が前接しない文のことである。

(17) 私自身も結婚するなら二十代の内に済ませたい。しかし、「なぜそう思うのか」と問われると返答に苦しむ。特に大きな理由はないのだ。つまり、晩婚化が進んだ理由の一つとして「早く結婚する意義を見出せなくなった」という点があるのではないだろうか。(j04-1-d3)

表 3 から「婉曲主張」の用法では「ダロウカ」が選択される傾向が強いことが分かる。その原因としては、この用法の機能によるものと思われる。庵ほか（2000）によると疑問文でノダが使われる場合とは、以下に挙げたもののうち、B タイプの場合に用いられる。

【疑問文の機能によるタイプ分け】(庵ほか 2000:283)

A. その文が正しいかどうかを尋ねるために使われるもの

B. その文が正しいことを知った上でその文の一部の成分を特定するために使われるもの

上記を踏まえ(16)を見ると、「考えられる対策とすれば、離婚のリスクを減らすなど」かどうかを尋ねる文であり、A タイプの文であることがわかる。(17) では、「つまり、～があるのではないだろうか。」と段落の帰結部分でまとめとなる主張を述べている。婉曲的な主張であり、B タイプではないためノダを用いる必要ないと思われる[16]。

4-3 婉曲的質問用法

「婉曲的質問用法」とは「書き手が想像の中で命題の真偽が不確定であると認識し、それについて読み手（第三者）に問いかける」ものである。読み手（第三者）が明示されていたり（例 18)、他者に意見を問うような「ご存じダロウカ」(例 19) や勧めの「いかがダロウカ」(例 20) の形をとる。(21) のように疑問詞が共起する場合もあり「問題提起」の用法に近いが、「皆さんは」と読み手（第三者）に問いかけるような表現があるものは「婉曲的質問用法」とする。

(18) あなたは三重県を訪れたことはありますか。三重県というと、なにが思い浮かぶでしょうか。(j21-1-d1)

(19) 実はこのチキン南蛮、他県で食べられているものとは全く異なるものであることをご存じだろうか。(j10-1-1)

---

16 「婉曲主張」ではダロウカを用いることにより問題は起きないと考えるが、ここで注目すべきは、表 3 にもあるように「婉曲主張」においてノダロウカの用例が 1 件あることである。以下にその用例を示す。筆者の内省では(ア)はダロウカに置き換えることができると判断したため、「婉曲主張」ではダロウカを用いることに問題はないと考える。

(ア) これは個人主義の浸透ともいえる。「安心」「癒し」を男性に求める女性が増えたという流れがあるのも、経済的な面以外で男性に求めるところが増えたということなのだろうか。(j11-2-8)

(20) 川崎市で文化散策などしてみてはいかがいかがでしょうか。（j18-1-d4）
(21) 江東区というと、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。（j04-1-d1）

表 4 からも分かるように、この用法は「いかが」などの疑問語と共起するがノ無しとなる傾向が強い。

表 4「婉曲的質問用法」の出現内訳

	疑問詞×	疑問詞○	計
ダロウカ	5	11	16
ノダロウカ			
計	5	11	16

その理由は、この用法が読み手に対しての質問という体裁を取っているからだと思われる。4−1 で述べたように疑問詞と共起する「問題提起」の場合は、何かしらの前提を踏まえた上で問題を提起するものであり、質問という体裁ではなく、自身に疑いを問いかけることによって読み手にも問題を提起するという体裁である。そのため前提は書き手自身の中に存在するだけで良い。しかし、婉曲的質問用法の場合、質問するという体裁上、前提は読み手の中にも存在する必要があるが、作文というものの性質上読み手の前提を推し量ることはできない。そのため両者の間に前提を共有できていない状態で「ノ」を用いると不自然となり時には失礼となる。そのため、(22) のように前提を共有できていれば、読み手に質問する場合でもノ有りを用いることができると思われる。

(22) 江東区というと東京ビッグサイトや豊洲市場など有名な場所がたくさんありますが、皆さんは何を思い浮かべるのでしょうか。（例（21）改変）

例えば（22）のように、「江東区」についての前提を共有した後であれば、婉曲的質問用法でもノ有りの許容度は多少上がると考えられる。しかし、この用法は（18）（19）（21）のように質問をするという体裁で問題を提起する場合が多いため、前提を共有できていない文章の冒頭部に出現することが多々見られる。そのため、本稿ではこの用法の場合、ノ無しを用いると示すことに問題はないと考える。

5. まとめ

最後に本稿の主張を図 2 にまとめる。疑問文におけるノダの使用ルールを示した庵ほか（2000）は的確にまとめられたものであったが、(23)（24）のように図 1 では判定が難しいものや、「疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合」というのも学習者にとっては判断が難しいと思われる。

(23) 江東区というと、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。（用例 1 再掲）
(24) このように、二つの側面で晩婚化の解消は困難を有しているため、今後も晩婚化は進行していくと考えるのが妥当ではないだろうか。（用例 2 再掲）

本稿では（23）のような例を読み手への問いかけがある「婉曲的質問用法」とした。図 2 では「読み手への問いかけ」Yes という部分に当たる。この用法は通常作文冒頭部において、読み手への質問という体裁を取って問題を提起するため、書き手と読み手の前提が成り立っておらず、ノ有りの場合不自然となりやすい。そのため、この用法の場合、「ダロウカ」を用いることにより不自然な文は生起しにくくなる。

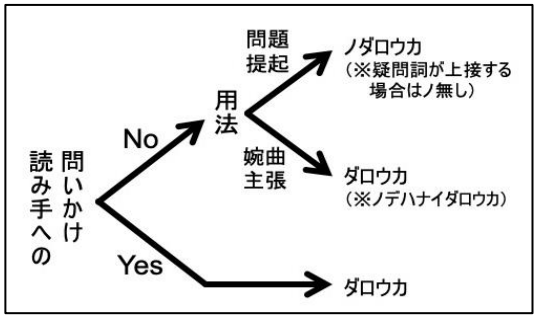

図 2 文末ダロウカで「ノ」が必要とされる場合

（24）は、読み手への問いかけがなく、疑問詞が共起せず、命題に対してある程度見当がついており書き手の主張を婉曲的にする用例である。「(ノ)デハナイダロウカ」と表される場合が多い。図 2 では「読み手への問いかけ」No→「用法」婉曲主張という部分に当たる。この用法の場合も、「ダロウカ」を用いることにより不自然な文は生起しにくくなる。

図 2 で「読み手への問いかけ」No→「用法」問題提起という部分に当たる「問題提起」用法は、何かしらの前提を踏まえた上での問題提起であり、書き手がまったく見当がつかない状態を表す。wh 疑問文では「ノダロウカ」を用い、「ダロウカ」に疑問詞が前接する場合はノ無しとなる。

庵ほか（2000）で示された「疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合」というのは、本稿で言えば「問題提起」用法の YesNo 疑問文に当たる。「問題提起」用法の YesNo 疑問文では、ノ有りとノ無しを互いに置き換えることができるが、何かしらの前提を踏まえた上での問題提起のため、ノダの「関連づけ」を適用できると考えられる。そのため、この用法の場合、「ノダロウカ」を用いることができると思われる[17]。

本稿では、先行研究の不明瞭な部分を補いつつ、図 2 に示すようにある程度簡略な使い分けルールを示すことができた。しかし当然のことながら、簡略化の代償として全てをカバーすることは難しくなった。いくつかの例外は補足として示す必要があるだろう。そして、今後の課題としては、日本語母語話者と非母語話者との比較が挙げられる。非

[17] 査読者より「問題提起」用法の YesNo 疑問文と分類されるもののうち、ノダロウカに置き換えができないいくつかの反例の指摘を受けた。以下の用例(ア)は BCCWJ からで、括弧内はコーパス内の用例番号である。下線は筆者による。確かに(ア)は、本稿の 3−2 の【分類基準】からいえば「問題提起」に当たる。しかし、(ア)は命題が不確定であるという状態を示すことにより、読み手に問題を提起するという「問題提起」とは働きが異なるように見える。本稿では考察していないが、(ア)は感動用法に近いだろう。つまり「アメリカ人とロシア人」の先見の明についての驚きを表しているように読める。(ア)を感動用法と分類するには、3−2 の【分類基準】では不十分であり、これは今後の課題としたい。

（ア）トクヴィルが「いつの日かその手に世界の半分の運命を握る」であろうと予見したのは、アメリカ人とロシア人である。おそるべき炯眼。いま、百五十年後の国際関係についてこれほど適切な予測を立てることのできる知性が存在するだろうか？（PB53_00196）

母語話者の用例を観察し、ノの有無の誤用を図 2 と照らし合わせ検討する必要があるだろう。加え、JCK 作文コーパスは規模としては小さく、作文の種類も 3 つのものしかないため、どうしても研究の結論としては限られたものとなってしまう。コーパスの規模を拡大することなども検討したい。また、注でも触れたが「(の)ではないだろうか」については別稿で取り上げる必要があるだろう。

参考文献

庵功雄（2015）「「産出のための文法」に関する一考察–「100%を目指さない文法」再考–」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三（編）『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版, pp.19-32.

庵功雄ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵功雄ほか（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

キャアコップチャイ　スィラッサナン（2010）「「だろう」の意味・用法–小説における分析–」『日本語／日本語教育研究』(1), pp.157-176.

三枝令子（2002）「書き言葉における「だろうか」「のだろうか」の使い分け」『言語文化』(39), pp.21-37.

白川博之（2018）「日本語研究から日本語教育研究への越境」『日本語の研究』14(2), pp.68-83.

野田春美（1997）『「の(だ)」の機能』くろしお出版

馮雁鴻（2019）「ダロウカの使用実態 –学習者書き言葉コーパスを使用して–」『日本語／日本語教育研究』(10), pp.85-99.

三宅知宏（2010a）「「推量」と「確認要求」–“ダロウ”をめぐって–」『鶴見大学紀要 第 1 部 日本語・日本文学編』(47), pp.9-55.

三宅知宏（2010b）「「不定推量」と「質問表現」–“ダロウ”をめぐって(2) –」『鶴見大学紀要 第 1 部 日本語・日本文学編』(47), pp.57-75.

使用データ

『JCK 作文コーパス』〈http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/〉2020 年 9 月閲覧

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』〈https://chunagon.ninjal.ac.jp〉2021 年 3 月閲覧

（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）